

水
流
れ
て
華
開
く

葉雨居士



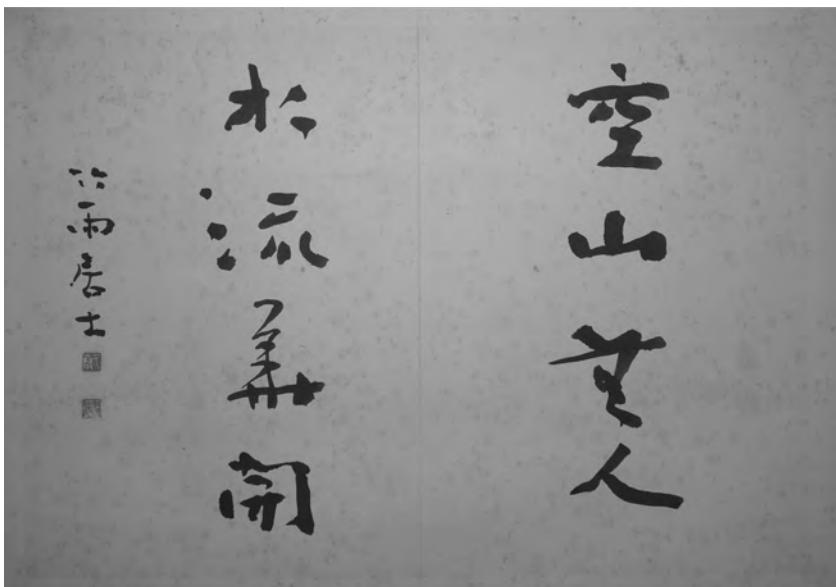
「落ち穂拾い記」

⑦「華開帖」 土屋竹雨

昭和年代

図版③ 「華開帖」 折り帖表紙の題簽

図版② 「華開帖」 全体



戦後、大東文化大学の初代の学長を務められた土屋竹雨（つちや ちくう、1887（1958）の筆になる折り帖の巻頭である。「空山人無く、水流れて華開く」の八字を半紙を横にして、ゆったりと二行に書かれている。紀年はないが、筆の運びに微妙な細かな動きが見られる所から、やや晩年に近い頃の書では無からうかと推測している。家蔵にある李宣倜（1876～1961）から土屋竹雨に送られた書の箱書き等には、時折右肩下がりの独特の書法で伸びやかな筆勢も見ることができる。しかしこの小品は、やや覚束ない筆勢の様でありながら、独特的の奥行きを感じさせる不思議な魅力度があるようと思われる。言葉が好きなので、時々出向く故郷の田舎の家の玄関に飾っている。右頁の主図版には、「水流れて華開く」の後半をやや縮小して示した。全体（図版②）と折り帖表紙の題簽（図版③）は、左頁に示した。土屋竹雨は、1914年、東京帝国大学法学部を卒業、各種の教職を経て、近代漢詩壇の第一人者となり、多くの漢詩を残した。本名は久泰、字は子健と称した。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。

木鶴室・伊藤滋

書道芸術院 平成の群像 (2016)



和 氣 しげ代

気づくこと

自分に気づくことの大切さ、気づくことで一日、一日やるべきことをきっちりと果していく。二宮尊徳の短歌に

この秋は雨か嵐か知らねども

今日のつとめに田草取るなり

秋にはこれだけのものを収穫しようと目標を定めて今日なすべきことをきちんととする。

結果は後からついてくるものと言う生き方

です。尊徳の生き方は教育の原点だと思いまます。

田舞徳太郎（「気づきの成功学」の著者）

は「気づきとは天地、自然、自分以外のすべての人に対する感謝である」と述べています。

恩師永井幸子先生が亡くなられて、はや

23年になります。私は2・3年ごとに引越

しをくり返していましたので東京へ落ち着

いたら「かな」の勉強をしたいと心に決め

ていました。書道仲間の友人に永井先生を紹介頂き、引越しの荷物も片付けないまま、神田岩本町にある先生のご自宅に伺いました。郵便受けの上にお洒落な字で小さく「書道 玉松会」と掛かっていました。

はじめて先生の運筆なさるのを見ました。

時の感動はしっかり心に残っています。

「初心忘るべからず」「継続は力なり」

心を支えてくれる言葉です。何度も立ち止

ては、また気持を入れ直して周りから元気を頂いています。お陰様 感謝の気持でいっ

ぱいです。何時からでも人は気づくことで

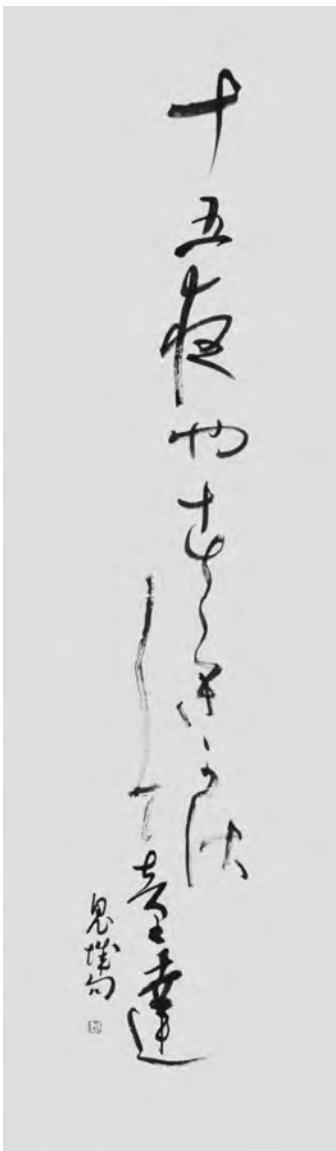
変わると信じています。

今年、全日本書道連盟では「日本の書道文化」をユネスコ無形文化遺産に登録するための活動を進めています。ロゴマークも作成され「書き初め」で書道文化遺産登録を目指しています。私の小学生の頃は新年の行事として1月

2日に書き初めを

しました。幼少時

代から「書」は身近にあり、親しんできた日本の文化です。この活動を機に次の世代に継いでいきたいと切に願っています。



「十五夜」 村上鬼城句
170cm×50cm

漢字(二)

生田翠龍

か
な
(二)

勝山初美

私は創作にあたって、作品に躍動感がみなぎり、若々しく生き生きとした表情となるよう心がけています。

もあります。老成して“枯れる”的もまた良しなのであります。

そうした作品も、点画・結体・文字群や余白を含む章法によって成り立っています。ペンと異なり筆で書くということは無限の書相を呈するのですが、そのことを最も単純な楷書の「一」で考えてみましょう。

ご承知の通り点画は起筆→送筆→收筆で成り立っています。

筆尖は起筆で八方の入角、送筆は露蔵鋒の3通り、これで既に192通りの書き分けが可能です。更に筆圧の変化（極大・大・中・小・極小）や筆速（速速）を考えてみます。さて、何通りとなるでしょうか。

こうしたことは歐陽詢『九成宮醴泉銘』にみられるのでですが、褚遂良は更に顕著にして『雁塔聖教序』を書いています。（図参照）おそらくは王羲之に学んだのでしょうかが、彼が始まではありません。

既に隸書の時代には自覺されており、『礼器碑』や『曹全碑』に明らかであります。こうしたことは、草書の発展と有機的に結びついた結果でしょうし、人の嗜みの合目的性と一致し、書は単なる書記を越えて、技芸化したのだと思います。

(図)『雁塔聖教序』に於ける「一」

	起筆	送筆	収筆	計
筆尖	(筆の入方)	(露鋒・蔵鋒)	(筆の出方)	
筆圧	8	3	8	192
(線の太細)				
筆速	(遅速)	5	5	125
	2	2	2	8

(表) 点画に於ける用筆

字種	文字	行列1	行列2	行列3
	一	序	序	記
1				
		913	1523	1306

(図)『雁塔聖教序』に於ける「一」



古箏手鑑



古筆手鑑 部分

高校生の頃から臨書学習をしてきたが、模倣して書くだけでなく、自分で調べて発表する勉強会は、かなを深める上の基礎となり、大きな宝物となつた。

泉会の仲間と一緒に勉強した夜の教室は、意義のある時間だった。その後、洋子先生のご指導のもと、かな臨書研究会が発足。参加者各々が担当する古筆の作者・時代背景・使わされている料紙などを調べて発表した。さらに先生の解説があり、実技では臨書・倣書等の作品を制作した。清書のために先生のお手持ちの紙などもいただき、最後に参加者全員が古筆11種の手鑑を作成した。

古筆を学ぶ
書泉会は、20年ほど前下谷洋子先生の提案で、「かな作品を書くには、漢字の勉強が必要」と月1回漢字の先生を招いて臨

勝山初美

か
な
(二)

4

特集：書道芸術院秋季展

書道芸術院秋季展

審査会員選抜作品
審査会員候補公募作品



会期 平成28年10月4日(火)～10月9日(日)
会場 セントラルミュージアム銀座

アートサロン毎日(推薦作家展会場・毎日新聞社内)

秋季展実行委員長

板垣洞仙

現代詩文書部の飯沼恵鳳、前衛書部の大嶋玲峰の5名が一人7m余の壁面に大作が展示発表された。

秋季展公募は近年最高の点数で、充実した作品が多くた。漢字・かな・

現代詩文書・篆刻刻字・前衛書の5部門を擁する総合団体の書道芸術院として、篆刻刻字の公募者がなかつたが、来年は第70回記念展の年であり篆刻刻字部の活性化を期待したい。

初日には表彰式・研究会が『銀座フェニックスプラザ3階』にて開催された。

研究会はスクリーンに推薦作家・秋季菊花賞作家の作品写真を写し、制作意

圖の発表・各部選考委員の助言、質疑応答があり、最後に辻元大雲理事長の総括で和やかな充実した会となつた。

その後、銀座東武ホテルで、多くのご来賓をお招きして祝賀会が開催された。

次回はさらに多くの公募者があり、参考者が増えることを期待している。

また、同会期に東京竹橋の『アートサロン毎日』にて「書道芸術院推薦作家展」が開催された。そこには、第69回展で審査会員を対象として選抜された「書道芸術院春華賞」として最終ノミネートされた作家、漢字部の大内熒軒・中尾琴麗、かな部の都丸みどり、

『セントラルミュージアム銀座』を会場にして3回目の秋季展が開催された。企画内容は例年通りで、財団役員及び本年2月開催の第69回書道芸術院展で審査会員候補からの公募作品の393点、229名の中から、厳正な選考の結果「秋季菊花賞」9名、「秋季俊英賞」41名、計50名の入賞作品が展示された。

また、同会期に東京竹橋の『アートサロン毎日』にて「書道芸術院推薦作家展」が開催された。そこには、第69回展で審査会員を対象として選抜された「書道芸術院春華賞」として最終ノミネートされた作家、漢字部の大内熒軒・中尾琴麗、かな部の都丸みどり、



推薦作家のみなさん

2016年 書道芸術院秋季展公募出品集計

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	落選
漢字	157	90	4	16	70
かな	17	15	1	3	11
現代詩文書	95	60	1	11	48
前衛書	124	64	3	11	50
篆刻・刻字	0	0	0	0	0
合計	393	229	9	41	179



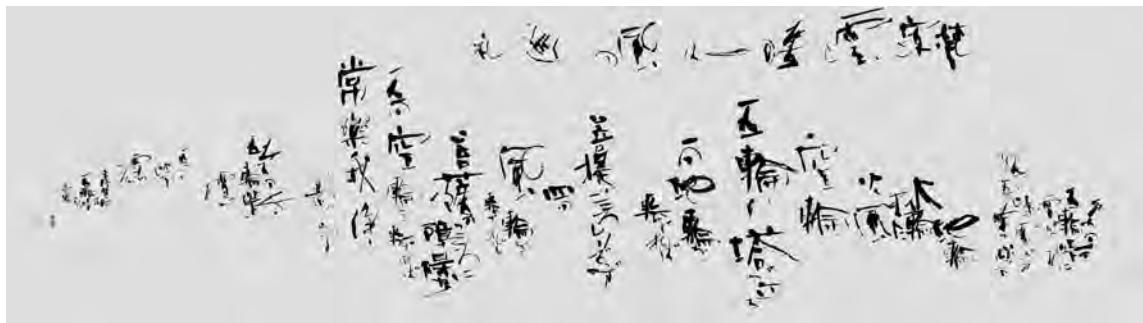
大勢で賑わう懇親会



表彰式・研究会

〈併催〉 推 薦 作 家 展

《飯 沼 惠 鳳》



〈五輪峠より〉

138×488cm

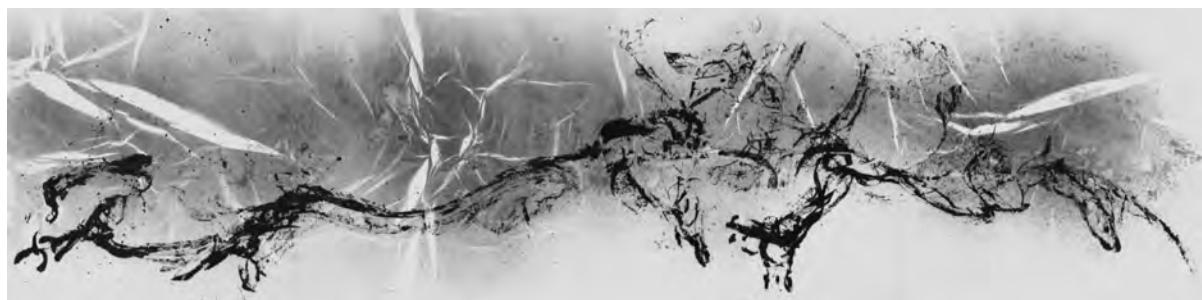
《大 内 燐 軒》



〈我心匪石〉

205×520cm

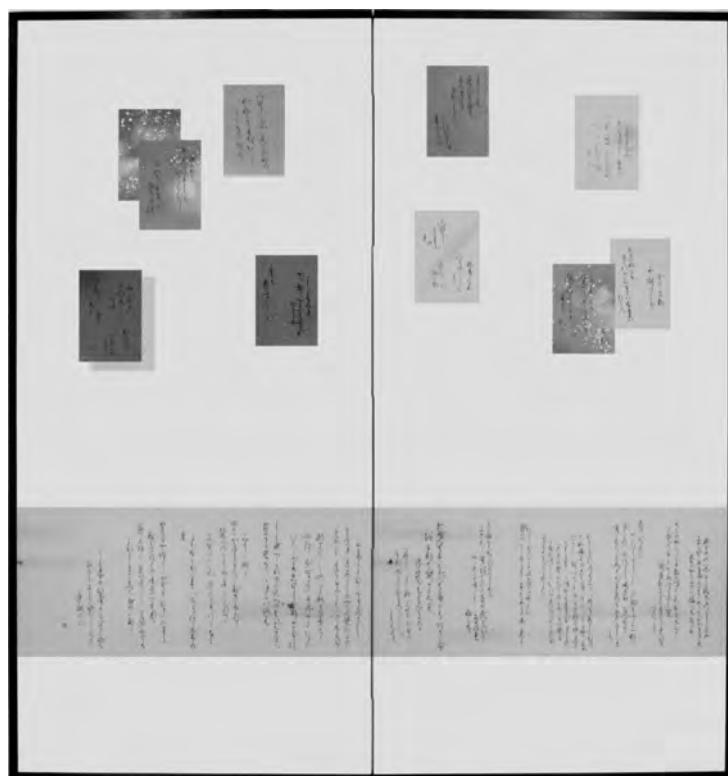
《大 嶋 珀 瞳》



〈しらゆきの……〉

120×480cm

《都 丸 みどり》



〈いくとせの……〉

150×140cm

《中 尾 琴 麗》



〈次北固山下〉

180×360cm

書道芸術院役員作品

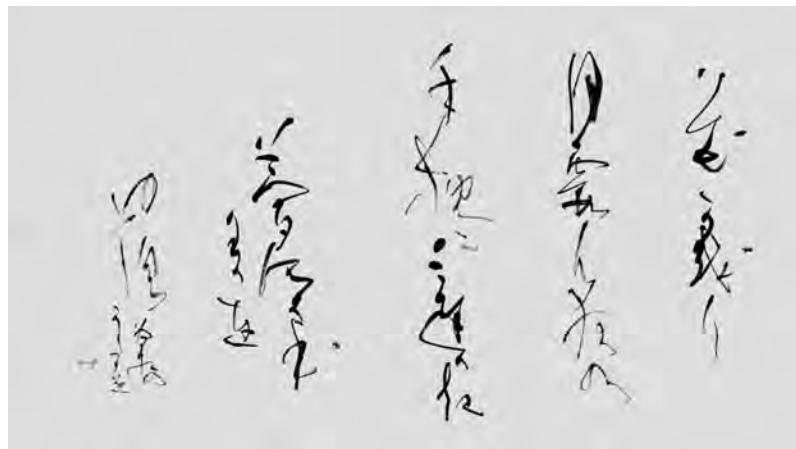
理事長・常務理事・審査会員選抜（常任総務・総務）

〈田の色に〉



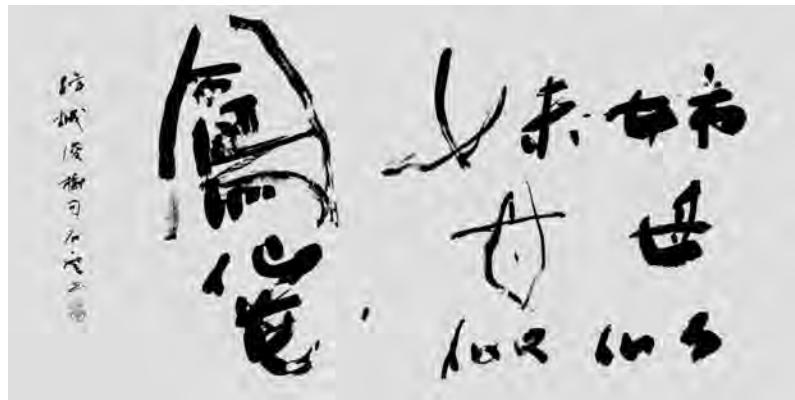
(公財) 理事長・常任総務 辻 元 大 雲 91×97cm

花かわり



(公財) 常務理事・常任総務 下谷 洋子 67×120cm

鳳仙花



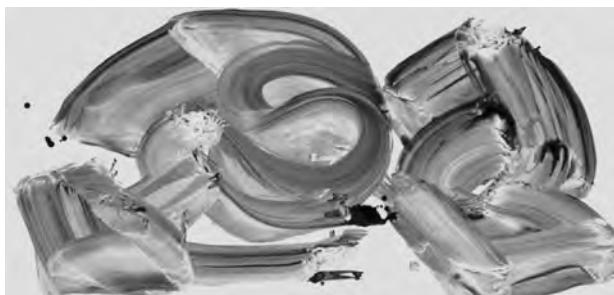
(公財) 常務理事・常任総務 小竹 石雲 70×137cm

窮則變
變則通



(公財) 常務理事・常任総務 後藤 大峰 70×100cm

翔



常任総務 大石仙岳 73×152cm

高村光太郎語より



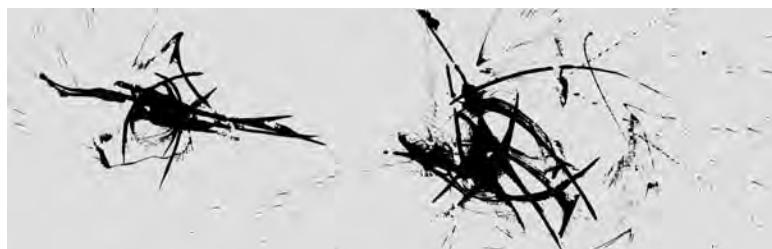
常任総務 大隅晃弘 70×145cm

時の流れ



常任総務 大平邑峰 60×180cm

七夕物語



常任総務 工藤永翠 61×182cm

登録持闇



常任総務 生田翠龍

鷹狩行の句



常任総務 及川豊流

180×60cm

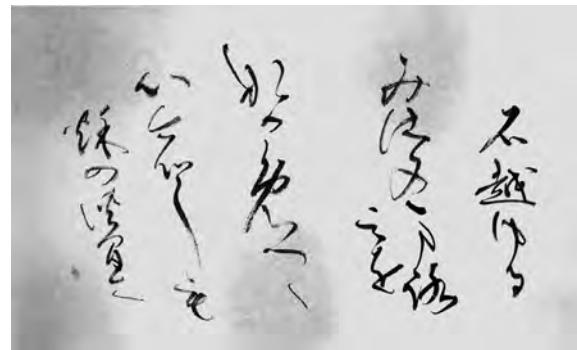
〈累による〉

常任総務 倉林紅瑠



110×80cm

〈石越ゆる〉



常任総務 木村東舟 70×120cm

〈出発〉

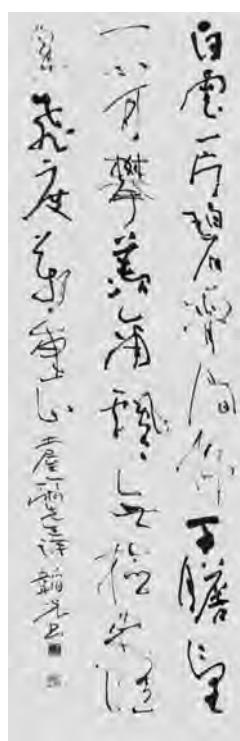
常任総務 木村貴衣



180×60cm

〔雲〕

常任総務 児玉輪光



178×57cm

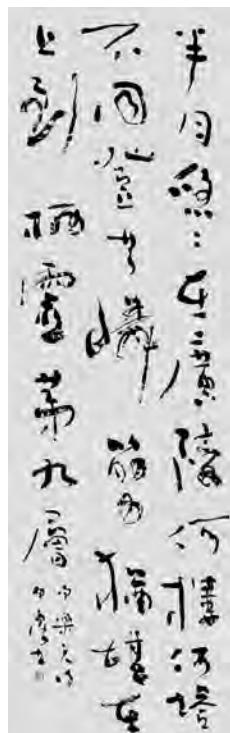
〔慈〕

常任総務 大町青蓮



180×60cm

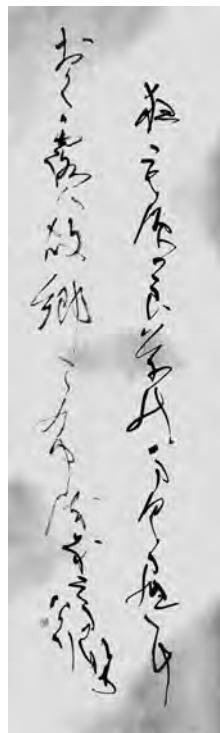
〈白楽天詩〉



170×53cm

常任総務
島田白露

〈夜もすがら〉



182×61cm

常任総務
田子白嶺

〈故里の空〉



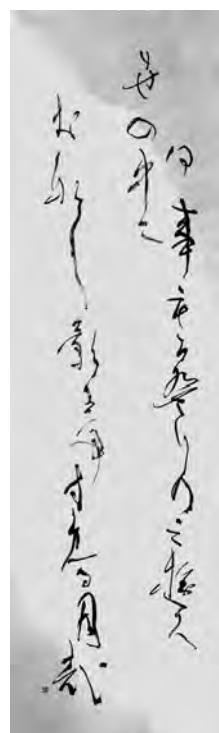
常任総務 佐久間 幸 扇 84×114.5cm

〈何事も〉



120×90cm

常任総務 鈴木せつ子



180×53cm

〈梅内美華子のうた〉

常任総務 田中扇溪



常任総務 広瀬舟雲 73×152cm

〈いのうのシンフォニー〉



常任総務 真下京子 73×152cm

〈いのう〉



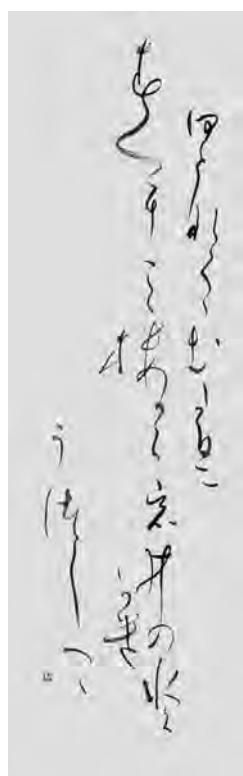
152×73cm

〈真澄鏡〉



常任総務 渡辺柱雲 105×105cm

〈何となく……〉



常任総務 和氣しげ代

〈久保田万太郎句〉



常任総務 横田汀華 61×182cm

172×53cm

〈知床岬〉



152×73cm

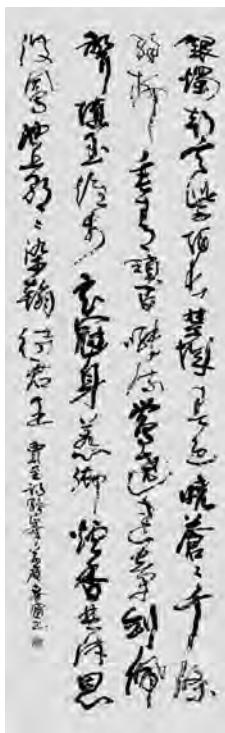
総務 菊田杏仙

〈感〉



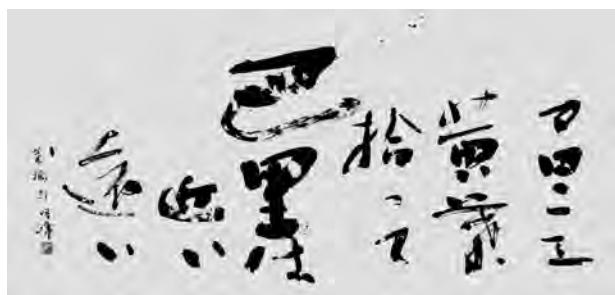
135×90cm

〈早朝大明宮至西省僚友〉



総務 一谷春窓

〈田里〉



総務 小竹明峰 70×145cm

〈遠〉



総務 川村美泉

〈近作一顆〉



総務 大沼樵峰

50×32cm

〈輝き〉



総務 木村笙園 90×120cm

〈永田和宏の歌〉



180×60cm

〈turn〉



総務 鈴木蕙月 91×121cm

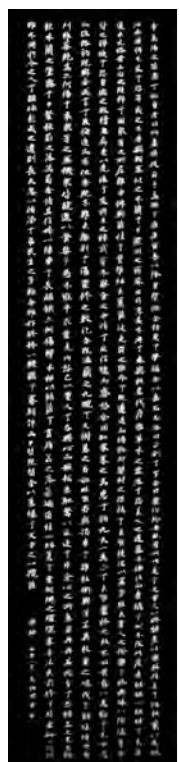
総務 武山櫻子

〈離騷〉



121×91cm

総務 高橋潤



169×38cm

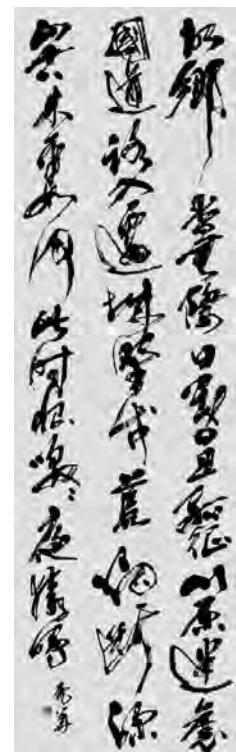
審査会員候補

秋季菊花賞



小泉潤

178×58cm



熊谷桃華

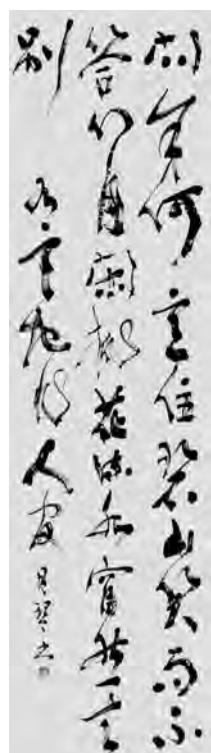
175×53cm



向井翠窓

120×90cm

山中問答



宮本月琴

165×45cm

〈こもれび〉



阿部邑里

180×60cm

〈魁夷の文〉



佐藤弦佳

182×61cm

〈秋の盛り〉



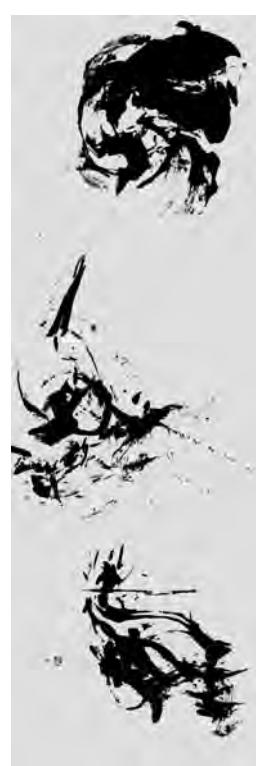
新谷嵐泉 48×170cm

〈共に〉



岩上郁子 105×105cm

寺澤悟子



182×61cm

蘭亭序（東晉・王羲之）②

〈解説〉 蘭亭序は、古くから書聖・王羲之の行書の最高傑作として尊重されてきた。全28行で、総字数28字、用筆、字形ともに優れ、行書としての完成された姿を示している。筆使いは伸びやかであり、字形も変化に富み、同一の文字はすべて

て異なる字形で書かれ（之は20字）、豊かな表情を見せていく。真跡はのちに唐・太宗皇帝が入手し、その死去の際、昭陵に副葬された。今、初唐の三大家らの名家の臨模本や、揚書人に模撮させた各種の模本が伝存している。

（編集部）

特別研究部臨書課題

II（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）

当該古典の左記掲載部分以外も可。

漢字研究部臨書課題

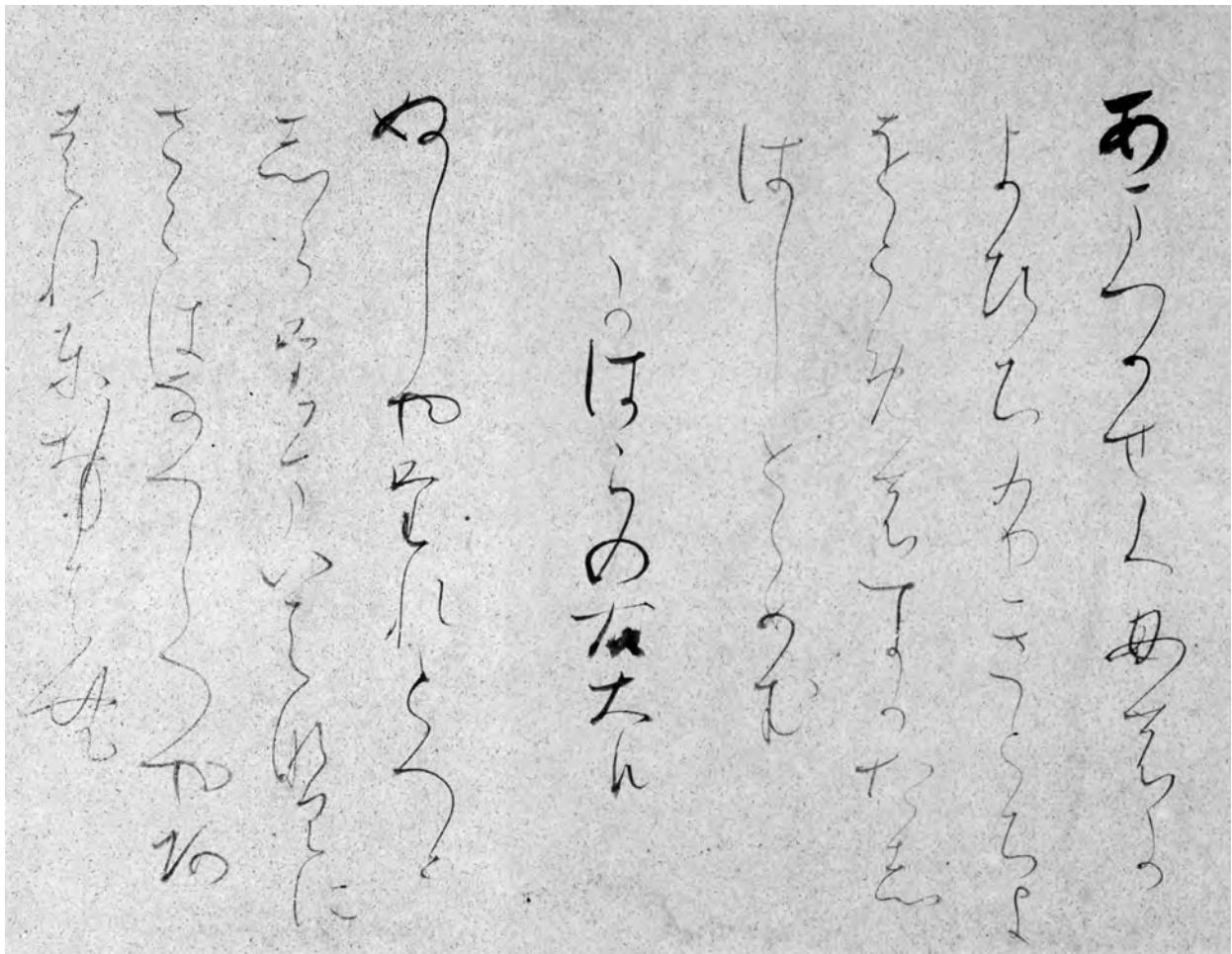
II（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。



張金界奴本（90%縮小）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

列坐其次。雖無絲竹管弦之盛。一觴一詠。亦足以暢敍幽情。是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰觀宇宙之大。俯察品類之盛。所以遊目騁懷。足以極視聽之



(曼殊院蔵)

古筆鑑賞 曼殊院本古今和歌集(伝藤原行成)②

古筆鑑賞

152

〈よみ〉 あまつかぜくものか ぬしやたれとへど
万 司 久 母 長 可 堂
よひぢふきとぢよ しらたまいはなくに
免 布 那 具
をとめのすがたし さらばなべてやあ
志 可 者 那 阿
ばしとづめむ はれとおもはむ
者 無

かはらの右大臣

解説

曼殊院本古今和歌集は、京都の曼殊院に来した「古今和歌集」卷第十七の零卷(卷子)のうち、内容の一部が失われ、部数のそろわないもの。また、その一部を残しているものである。

歌の作者の氏名または名は書かれているが、詞書は省略されている。歌一首行頭をそろえ、4行書されている。

字形は整齊で、筆線は清澄にして鋭い。はじめは太く濃く書かれているが、やがて細く薄くなり、絹糸のように繊細である。長く続く連綿は気品に富んでいる。
 筆者は藤原行成(972~1028)と伝えられるが、その自筆と比べて書風が異なり、行成よりさらに下って11世紀後半ごろの筆と考えられる。

(編集部)

※掲載版は90%縮小

※落款を必ず入れる。署名、もしくは
○○臨(押印のみも可)

かな研究部
臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
 別紙を裁断して貼付也可。半機紙は半紙サイズに切って使用のこと。
 上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部
臨書課題

(毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
 上記の掲載以外も可。

習い方解説 (二)

辻元大雲

神情朗達

(晋書)

精神が潤達なこと。



作品を創作する場合に古典の書風を基にして制作する場合があります。做書ともいわれますが、全くでも創作への準備練習として行うものであります。古典の字形そのままを並べても作品にはなりません。字形ばかりでなく、運筆のリズムや全体構成の工夫など、色々なステップを乗り越える必要があります。楽しく挑戦してみましょう。

前号に続き4字句です。精神が潤達なことの意味で出典は晋書です。今回も行書表現で、王羲之の蘭亭序をベースに表現してみました。「情、朗」は原帖にありますので参考にしてください。筆は前回と同じく兼毫筆を使用しています。

習い方解説 (二)

川島舟錦

光陰可惜 (『顏氏家訓』〔勉學〕)
(光陰惜しむ可し)

流れゆく川の水のごとく、月日
は過ぎ去り返らないので大切に。

楷書は、唐時代の「九成宮醴泉
銘」「孔子廟堂碑」「雁塔聖教序」
など、引き締まつた点画や端正な
字形で、「楷書の傑作」といわれ
るものは、しっかり学びたいもの
です。

また、「牛橛造像記」を習うこ
とにより、力強い線質を磨くこと、
「顏氏家廟碑」で、重厚かつ粘り
強い線質を鍛えることも必要です。
さらに、「蘇慈墓誌銘」の整齊
美、「樂毅論」の筆力雄健、品位
と気魄に満ちた書を追求すること
も大切かと考えます。
「般若心經」にまで発展させて、
四国八十八ヶ所巡りを楽しむ方も
おいでるとか……。

光陰可惜 よみ(光陰惜しむ可し)

升錦書

書体=楷書



習い方解説 (二)

石井明子

旅人の宿りせむ野に霜降らば
吾が子羽ぐくめ天の鶴群

(作者未詳・萬葉集)

4月号冒頭で下谷先生が、紹介された高階秀爾の著書は読みましたか? 西洋美術史家ならではの幅広い視点は参考になります。その種の心の栄養をとりながら、前段階を丁寧に学ぶと創作への道に近づくでしょう。

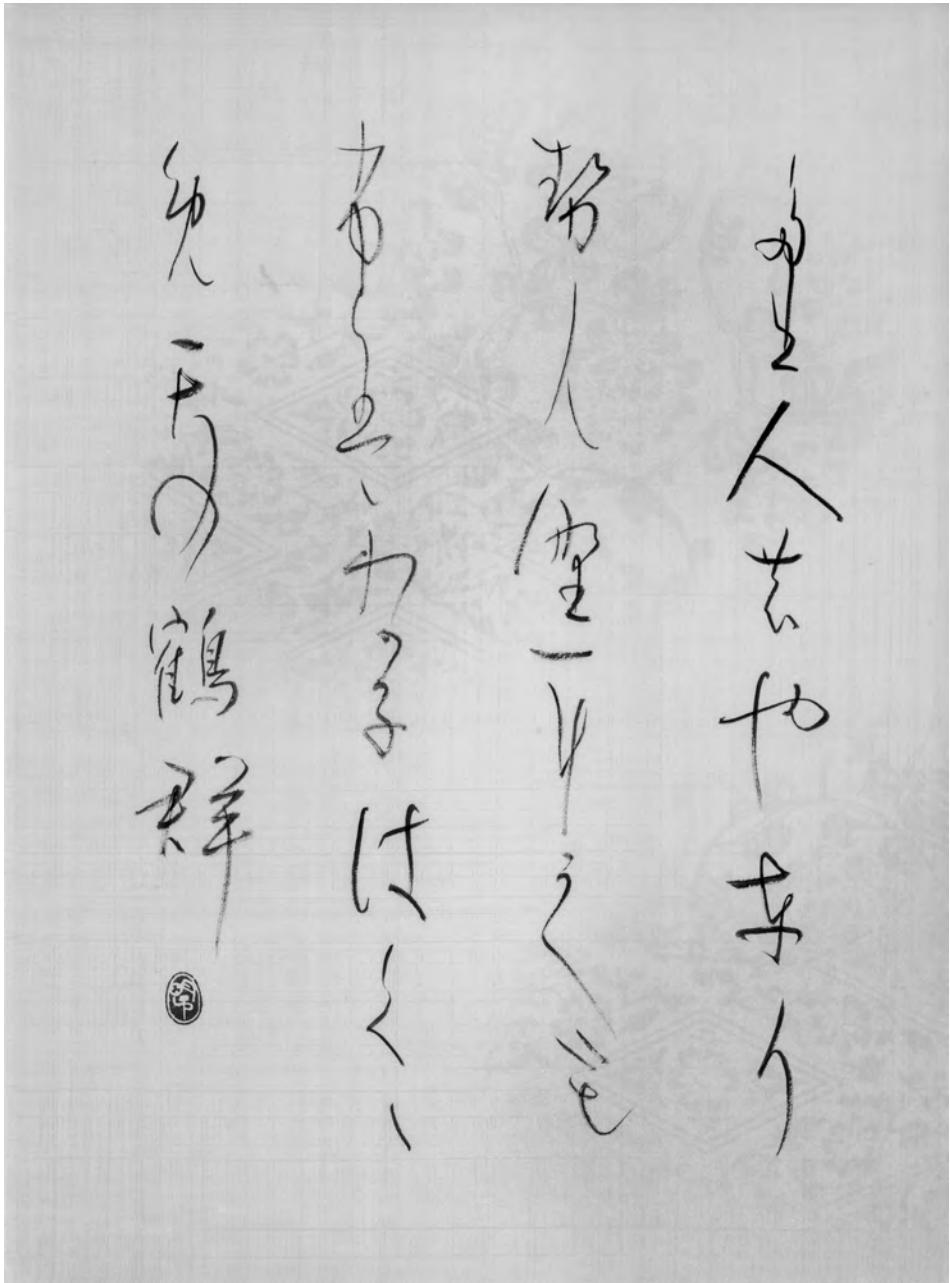
「座右に字典を」はその一つです。書こうとする文字を一字ずつ確めて下さい。知っている筈の文字もです。思いがいをしていたり、新しい字にふと出会ったり、ということがあります。また、手本は真似るだけでなく、頭と心を使つて、批判精神を働かせて利用しましよう。わからないことは指導者や先輩の判断を仰ぎましょう。

疑問を持つことが、自分の書を変え、前へ進めてくれる原動力となります。

よみ方

旅(多悲)人の(農)宿(や東)りせ(勢)む(无)野に(耳)霜(之)毛(降)布(らば)(盤)
吾(わ)が(可)子羽(は)ぐ(久く)め(免)天の鶴群

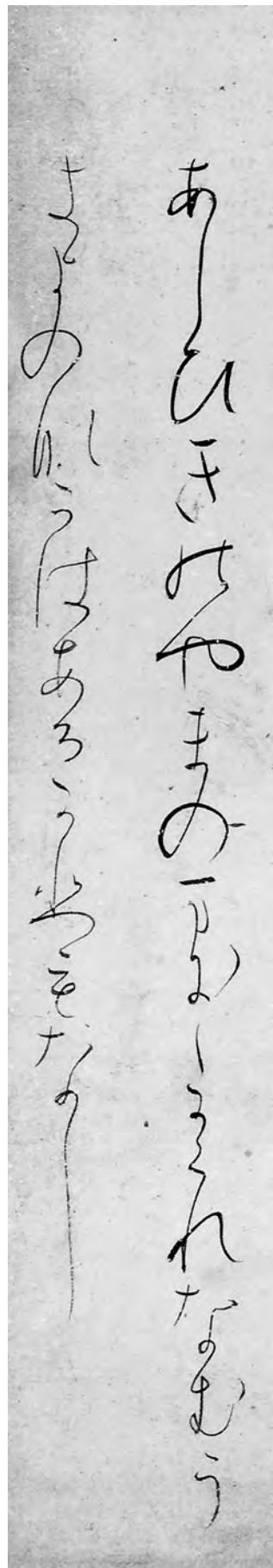
創作



かな規定秀級以下【十二月九日締めきり】用紙半紙タテ $\frac{1}{2}$ 〔料紙可〕(たて32センチ・よこ12センチ)

תְּמִימָנֶה וְעַמְמָנֶה בְּבֵית־יְהוָה

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



習い方解説 (二)

善養寺 紅風

冬寒み空に氷れる月影は宿に漏る
こそ解くるなりけれ

いわむら ひおがわ もとよ

かな条幅規定【十二月九日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

善養寺紅風選書

よみ方
あしひきの(能やまのま方)に(尔)くか(可)く(久)れなむう
き(支)よのな(那)か(可)はあるか(可)ひ(悲)も(毛)なし

نیز پرستاری کیا
کوئی نہیں میں کیا
کوئی نہیں میں کیا
کوئی نہیں میں کیا

よみ方
冬寒み(三)空(所羅)に(耳)氷(こ本)れる月影は(八)
宿に(二)漏(毛)るこ(古)そ(楚)解(登)く(久)る(流)な(奈)り(利)け(介)れ(連)

創作

出品券
貼付位置

※よこ形式に限る

流れが縦よりむずかしいと思いま
すが、何枚も書いていくうちに流
れがつかめきます。中央を高ま
りとし、くのようにならう文字程
度、行に添えることによって、行
が立体的になります。変体かな
(そ)の2画目は突き出さない

漢字条幅規定 初段以上 [十二月九日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

小竹石雲選書

習い方解説 (二)

小竹石雲



夜露無聲衣自濕 秋風有信葉先知

(趙孟頫)

(夜露声無く衣自ら湿り、秋風信有り葉先知る)

書体=自由

行書で直線を主体とし、殆んど連綿を用いず単体でまとめてみました。米芾の伸びやかさと、蘇軾の骨力を加味した雰囲気で書いてみました。

◎工夫した点

- ・「聲」の最終画を長くすること
- で生じた余白を生かすため、「葉先」をつめてみました。
- ・力まず呼吸長い運筆に心がけました。

*たて形式に限る

習い方解説 (二)

前田龍雲

漢字条幅規定 秀級以下 [十二月九日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

前田 龍雲選書



意味は「秋の声が天地に満ちている」です。
今回は行書を参考手本にしました。東晋時代の王羲之がこのよう
な書風を確立したとされています。
技術の鍛錬はもちろん必要ですが、
時には当時の時代背景を想像して
優雅な気分に浸りながら、情景を
浮かべて書いてみてはいかがでしょ
うか。

秋聲天地間
(秋聲天地の間)
(陸放翁)

書体=自由

習い方解説 (二)

塚越紅苑

朝夕にぐっと冷え込み、平野にも霜
がやってきます。
くぬぎや楮、櫻や柏の木の実がどん
ぐりです。まん丸いものから、先のと
んがつたものまで、形はいろいろです。

縄文時代には、汲抜きをして食べてい
たといわれてますが、種類によつては
ほのかな甘みのあるものもあります。
秋のどんぐり拾いは、子供達の遠足で
の楽しみです。

行書で書いてみました。楷書に比べ
て、形にも運筆にも動きがあり、速く
書けるので実用的ですが、自己流にな
りがちです。古典の臨書を通して、文
字造形の美しさを作品に活かして下さ
い。

※落款を必ず入れる。
(自分の名前を入れること)

どんぐり、こうこうドンブリコ
お池にはまつてさあ大麦
どじょう、かまて来て今日は
坊ちゃん一緒に遊びましょ♪

紅苑書

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

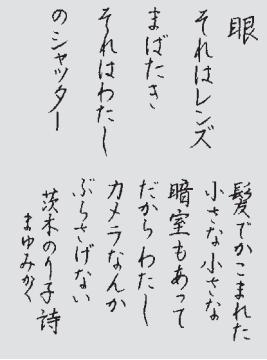
ホープ作品 各部総評

No. 665

ペン字部 師範 西川まゆみ
力強い線質で、字形良く懐が広く堂々とした表現が魅力。構成も見事で、余白が美しい。

◎ペン字部総評 難しい題材で制作に苦労のあとが伺える。起筆から終筆まで緊張感の伝わる文字を。

(鄭雲評)



かな条幅部 四段 加瀬 作穂
しっかり手本を把握し、リズムにのった動きもかなり熟れて今後が楽しみ。この料紙には墨が濃い。

◎かな条幅部総評 変体がな東連、漢字の鼎など誤字多く残念。普段から手本の文字の咀嚼を丁寧に行い理解して臨みたい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 細野 遊山
漢中摩崖の悠然とした趣き。ゆつたりとした運筆で、柔軟な線が美しく、創意に溢れた魅力的な作。

◎漢字条幅部総評 上級は行草書作品が大半。横形式作品の工夫が鍵。下級は一行書で一貫性のある作品が多く見られた。(萬城評)



前衛書部 特選 佐藤 奎山
潤滑や線の太細の変化を巧みに組合せ遠近感を表現し、また中央の余白が全体を引き締めた作である。

◎前衛書部総評 作品制作への意欲と工夫が見られた。今後の創意と表現を期待したい。(蓮紅評)

現代詩文書部 特選 永井 凪雪
多彩な線の表情の中に細い線に魅力を感じさせる。また行間の余白が生かされ、明るく味わい深い。

◎現代詩文書部総評 構成の工夫が多く見られた。線にも練度が増し、期待大。

(弄石評)



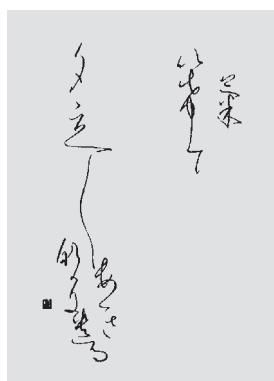
かな部 師範 岩瀬 祥園
稀に見るスケールの大きい作品です。字の大小、粗密、暢達の絶妙さから生まれた完成度抜群の作。妙さから生まれた完成度抜群の作。残念。また貧弱な線の作品散見。

◎かな部総評 多数の人が「居る」の変体がな遣を把握できず誤字で豊かな線の研究を望む。(明子評)



漢字部 師範 吉瀬 彩雨
ねばりある線質を生かした草書表現で、落ち着いた滋味ある作。

◎漢字部総評 上級書体自由で多彩な表現が見られるが練度の浅い作が多い。下級の楷書を含め、鍛えられた線、造形を望む。(大雲評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)



木村霜華書

180×60cm

前衛書
(秋桜) 木村霜華 「心象」

関口天峰書



135×70cm

◆力強いタッチで墨魂鮮やか。切れ味よくリズミカル。中央の細線がメリハリを作り下部へと導く。

(京子評)

◆エネルギー感のある筆致が大きく躍動し、スケールの大きな作。二層紙の特質を生かし厚味ある表現。

◆エネルギー感のある筆致が大きく躍動し、スケールの大きな作。二層紙の特質を生かし厚味ある表現。

(大雲評)

◆スケール大きく、豪快な運筆に圧倒された。上部の墨量と中央の渴筆の変化が絶妙。

(峰子評)

かな (如月) 治田芳江



治田芳江書

54×180cm

「ひさかたの」

◆横作品をものともせずスケールの大きい動きで大胆な作品に仕上がった。最終部分の布置見事。

(峰子評)

◆リズミカルに爽快な線を刻み込む筆力に敬服。潤滑のバランスが自然で無理なく、技術の高さを見せる。

(大雲評)

◆筆墨と紙の相性よく用筆自然、冴え、爽快な作品。中央部分が暢び、末部を締めた構成が巧妙。

(萬城評)

(京子評)

漢字

関口天峰

◆淡墨の効果で、柔軟な趣きの作品。変化自在な筆法で多彩な線性を生み、見所が多い。

(萬城評)

◆全紙縱に一文字は構成上平凡になりやすいが、筆端の切れ味を生かした淡墨表現は見事。落款印は要参考。

(大雲評)

◆筆を開いて紙に深く入り、筆をしばって細く鋭く…。自在な手法に敬服。しんにょうの位置が巧み。

(峰子評)

◆運筆自然で文字の骨格も残し、淡墨の効果による爽やかな作。

(京子評)

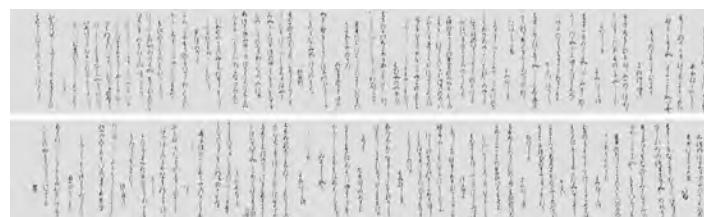
臨書 (大雲)

名取美紬 「薦季直表」

◆温雅な線性で一貫。原帖を着実に鑑賞しての真摯な臨書の姿勢が窺える。余白も美しく好感が持てる。
 ◆素直で率直な気分溢れる柔らかな筆致が落ち着いた雰囲気を醸し出している。落款ややおとなしいか。
 (大雲評)

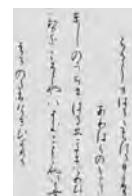
◆原帖の素朴で温かみを力まず、最後まで氣脈を貫通させて臨書した。しつとりした丹念の作に好感。
 ◆一文字一文字を丁寧に運筆したあたたかさを感じさせる臨書。字間・行間の空間構成見事。
 (峰子評)

臨書 (千葉) 平野笛舟 「高野切第一種」



60×176cm

部分拡大



◆高野切の美しい料紙を使用し古筆の特徴をよく捉え、品格ある作品となった。軽折が少し硬いと感じるのは筆のせいか。

(峰子評)

◆太細の変化。ゆったりとした呼吸。原帖の持つ雅の世界。現が難しい古典に良く近づけたと思う。
 (萬城評)

◆古筆の代表に真剣、真面目に取り組む姿勢を買う。原帖の特徴をよく観察し、安定した運筆に敬服。
 ◆文字の造形、行の流れ、線の太細、墨の潤渴など研究した真摯な臨書。
 (大雲評)
 (京子評)

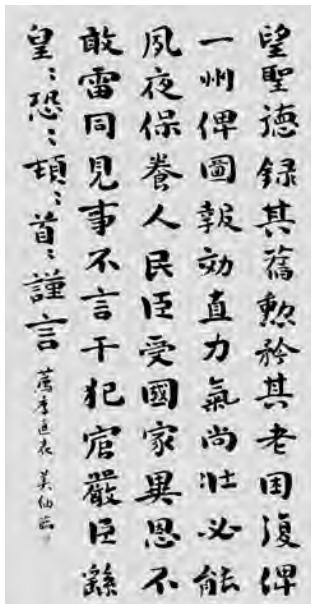
現代詩文書 (八戸) 市川紫泉



60×180cm

「寺山修司の歌」

名取美紬 臨



137×70cm

◆音楽的なリズムを感じさせる印象的な作。潤渴の変化が紙面に動きを与えて妙。追・道やや弱かったか。
 (大雲評)

(峰子評)

◆起承転結の作品構成が巧み。破筆の一線一線がそれぞれ魅力的な変化に富み、力量を感じる。
 (峰子評)

◆毛筆の機能を巧みに生かし渴筆が美しい。構成も自然体で淡々と書かれ歌の光景が浮かぶ作。
 (京子評)

市川紫泉書

創作の部	漢字	—	10点
前衛	—	1点	かな
現代	—	17点	漢字
漢字	—	24点	かな
漢字	—	4点	漢字

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」
 大拙畠中 成山
 奥田小林 純風
 曹泉西巻サト子

「かな」
 もく西川 藤象
 うる今関 心華
 陽陽岩崎 阳光
 玄穹千葉 紅雪

「前衛」
 秀水坂井 初江
 山王鉢木
 和香大和
 蓮紅田村
 篤信三浦
 「現代詩」
 「漢字」
 千葉竹浪
 大雲佐藤
 千葉坂本
 大雲江本
 八街石橋
 翠峰龍水
 興舟希雲
 叙舟朱鳳
 (臨書の部)

総出品点数
 85点

漢字研究部
(薦季直表)

選評名越蒼竹

今月のホープ作品

臣受恩

渡邊信代

漢字研究部 特選 渡邊 信代

既成観念にとらわれず、素直に古典に向きました。扁平な字形を生かして六文字をうまく配置できました。字粒もほど良く原帖の雰囲気を再現できています。落款は少し大きすぎた感じです。

◎漢字研究部總評

薦季直表は、一見可愛らしいところとした

字に見えますが、まるで書けば良いわけではありません。また独特の字形のゆがみも、私たちが見慣れた唐時代の楷書と違って、楷書黎明期に真率に書いた結果だと思われます。そこに品があるから、知識と技で攻めて行くと心を打つ臨書になります。こういう古典切です。ただ筆力があり線の充実した作品が多く、心を打つ臨書になりました。



煌由真芳香秀美
泉子弓枝舟行

清江則葵竹実千代
風彩子龍葉代

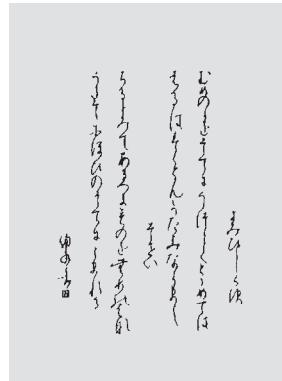
淑麗正淳朱惠
子流枝子星仙

翠逢惠多
雪春子生舟佳

か な 研 究 部
(高野切第一種)

選評 庄 司 紅 郊

今月のホープ作品



茂木絢水

かな研究部 特選 茂木 紗水
高野切第一種の墨色の変化に気を配り、線の美しさを見事に表現出来ました。連綿の流れと、行間の響き合いも、安定した筆使いで良く捉えています。
◎かな研究部総評
最も基礎的で、連線の美しい古筆を学ぶ事は、かなを学習する者にとって、とても大事な事です。正しい整った形を繰り返し学習しましょう。

かな研究部成績表

哲愛春

裕清耶

幹香美

良祥良

子石華

美耀衣

牛舟梢

江風泉

富高誠樹明正八昆た富硯清稻芳潮蒼う「樹高墨た」大附幕祥東梓福富秀華書苑大澄玄秀梅高こ東青澄陽誠う幸彩花正有正貴陰和原灌華生陽か貴水月毛蘭音原信「原嶺花か」雲中張素回江川貴水桂游書阪春宮明柳真だが終峰春陽和るの扇舞藝秋華

芳聖正明竹書椿竹もあ梓硯　如白長秀高祥澄長正前樹は麗玉白澄泉土天皓大秀春堺た玄立卯玉卯青書旭青蕙　詢安祥
選蘭停華漢美游翠美くか江水　月露月韻陵紫春月華橘原せ澤川珠春会氣鐘映阪水汀　か穹精月川月峰游老峰書　扇波紫
209渡渡驚吉横遊安八森本望宮三松松増眞堀船深平東春早長長野西浪永仲中豊富富利樋千千高高高高高平閑鈴鈴杉
名邊渡田吉山佐鳴木田吉月澤嶋木本村田塩井木堀山田坂谷中山山川田里嶋田澤子守泉葉山高原橋橋口木木木
氏名略　惠美将鶴子蘭真砂子草秋子明季泰子佳栄子法悦子清洋子喜葵秋時子芽星子久子翠子蘿子朝子
信玄將太藤公一等沙子草秋子明季泰子佳栄子法悦子清洋子喜葵秋時子芽星子久子翠子蘿子朝子